様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１３６

研究課題名（和文）唐時代における道教礼拝像の革新性とその展開

研究課題名（英文）Innovativeness and developmet of Taoist images of worship in the Tang Dynasty

研究代表者
齋藤　龍一（SAITO, Ryuichi）

成城大学・民俗学研究所・研究員

研究者番号：７０５７３３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、唐時代(618-907)における道教の礼拝対象=道教像について、美術史研究の視点で関連作品の調査と考察を試みたものである。研究の中心としたのは、道教最高神格である三清、つまり元始天尊、霊宝天尊、道徳天尊の主尊像三体一組からなる礼拝像=三清像の出現についての検討である。
　三清像の出現時期は唐時代後半を遡ることはなく、地域的には四川において創始された可能性が高いこと、またその造像形式は道教信仰者・教団が独自に生み出したとは考えにくく、同時期の仏教造像から少なからず影響を受け出現したと考えられることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and examines images for worship, such as ‘Taoist’ statues in the Tang Dynasty China, from the viewpoint of art history. In particular, this study analysed the emergence process of Taoist statues the ‘Sanqing’ : Yuanshi Tianzun, Lingbao Tianzun, Daode Tianzun.
On the basis of this analysis, I point out a clear some of the issues. The emergence time of Taoist statues the ‘Sanqing’ Is not be traced back to the late Tang Dynasty, it is likely to have been the originator in Sichuan provinces. It is not thought that Taoist believers and community produced Taoist statues the ‘Sanqing’ format. It is influenced by the Buddhist statues at the same period.

研究分野：中国仏教・道教美術史

キーワード：中国美術　道教美術　唐時代　道教像　天尊　三清　仏像　四川

1．研究開始当初の背景

唐時代(618-907)、仏教は隆盛を極めその影響は遣唐使などを通じ日本にも及んだが、道教もまた国家的な庇護のもとで発展した時代でもあった。その要因のひとつとして、唐の宗室である李氏が、姓を同じくする老子(名は耳、字は聃、姓は李氏という)を自らの祖先として崇敬したことにある。なかでも第九代皇帝・玄宗(在位 712-56)はとくに道教を篤く信奉し、道教を仏教より上位とし道士の司馬承禎より法籙を授けられ『御注老子道徳経』など道教経典の注疏を著すほか、老子に「聖祖大道玄元皇帝」の諡号をあたえるほどであった。道観は唐全土に設けられ、玄宗の姉・玉真公主、妹・金仙公主は共に出家し道士となり帝都長安の女冠観に住するなど、さながら道教国家の様相を呈していた。当時の道観は現存しないが、その様子は杜甫「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」など当時の詩により伺い知ることができる。

さて唐時代の仏教美術に関しては広範かつ詳細にわたる研究の積み重ねがあるのに対し、道教美術に関する研究はほとんど進んでいないのが実情である。これまでの主要な先行研究としては、神塚淑子氏による唐時代道教像についての銘文検討を中心とした論考や、李松氏による道教像全般についての網羅的な集成と考察がある。両氏の研究は極めて示唆に富むものでありその意義は大きく、唐時代の道教像についての概要はすでに明らかとなっている。しかし、いまだ解決すべき個別の問題が多くあることもまた事実である。

2．研究の目的

南北朝時代にはじまる道教像の造立において、仏教の如来に比すべき主尊は老君(老子)や天尊であることが一般的であり、如来と老君ないし天尊が並坐する仏道併存像もみられる。しかし唐時代になり革新的な変化がおこっている。それが三清像の出現である。先述した背景を踏まえ、本研究は道教最高神格の三清像、つまり元始天尊、霊宝天尊、道徳天尊の主尊像三体一組からなる礼拝像の出現過程の解明を目指しながら、唐時代における道教像の広がりと展開、特にその造像様式にみられる地方性の諸相を解明することを目的としている。

3．研究の方法

2009年に大阪市立美術館ほか計3会場で開催した展覧会「道教の美術」において作成した道教関連作品データを底本とし、近年中国で刊行・発表が相次ぐ数多くの道教美術に関する図録・報告書及び論文を収集した上で、現存する唐時代道教像関連作品データベースを作成した。このほか 2013 年 6 月には韓国国立中央博物館において開催された国際シンポジウム Trends and Prospects for Exhibitions of Taoist Culture において招待発表し、その際にアメリカ・シカゴ美術館における道教美術展主担当者 Stephen Little 氏(現 Los Angeles County Museum of Art)、フランス・パリのグランパレで開催された道教美術展主担当者 Catherine Delacour 氏(元 Musée des arts asiatiques Guimet)らと道教に関わる新出作品について意見交換を行った。また 2014 年 3 月には韓国初の道教美術展「韓国の道教文化」において韓国所在の道教関連作品の調査を行った。こうした情報収集・調査を踏まえ、2014年8月に河北・山西・河南における現地調査、次いで 2015 年 8 月には四川成都市・資陽市・綿陽市の現地調査を実施した。

4．研究成果

唐時代前半(618～8 世紀前半)の道教像は、隋時代のそれと形式的に大きな相違はみられない。ただし老君ないし天尊の大型独尊像が造られたことは注目すべきであろう。その代表として、石造老君坐像(陝西・西安碑林博物館)、石造常陽天尊坐像(山西博物院)がある。前者は玄宗がしばしば訪れた華清池で知られる驪山(西安市臨潼区)の朝元閣(老君殿)に安置されていたと伝えられる。総高 195 ㎝の白大理石製、恰幅がよく若々しい顔立ちの老君独尊像であり、朝元閣の主尊に相応しい堂々としたすがたである。本像については安祿山がその石材を河北から運んだという伝承があり、皇帝に近侍する高官により造立された可能性が高い。また後者は山西西南部の安邑県に所在していたもので、総高 251 ㎝の白大理石製という唐時代以前の道教像としては現存最大の大きさを誇っている。台座の銘文により、本像は開元七年(719)に常陽天尊として造立されたことがわかっている点も重要である。両像とも白大理石製であるが、これは南北朝時代以来、仏像を彫出する際に最も良い石材とされてきたもので、このような白大理石による大像の造立は、唐時代における国家的宗教としての道教の隆盛を彷彿させるものである。

唐時代後半(8 世紀中頃～907)になり、道教像に大きな変化がみられるようになる。それが主尊を三体一組とする三並坐像の出現である。その代表的なものが、四川眉山市仁寿県・牛角寨摩崖造像の三宝窟で、道教の諸尊が数多く彫出されている。このうち正面壁の中央に三尊が並び、それぞれ向かって右から順に宣字形台座、中央は蓮華座、左は宣字形台座に坐している。いずれも右手は膝に置き、左方像のみ麈尾を執る左手が現存するが、おそらく三体共に同じポーズであったと推測される。三宝窟には「南竺観記」という刻銘があり、これにより三並坐像が天寶八年(749)に造立された「三宝像」であることが

明らかとなっている。この三宝とは「三宝霊宝洞玄自然九天生神章経」に説かれる三宝君、すなわち天宝君、霊宝君、神宝君の三神であり、さらに三宝君は名称こそ異なるものの三清とほぼ同一の神格とされている。また同じく四川の資陽市安岳県・玄妙観においても道教の三並坐像が確認できる。玄妙観は大巌石と称される巨石を中心とする摩崖・龕で、ここに刻まれた「啓大唐御立集聖山玄妙観勝境碑」により、主要なものは天寶七年(748)までに造立されたことが明らかとなっている。このうち最大の龕は老君像を主尊とするもので、本碑はその脇に所在しているが、このほか天尊・釈迦並坐像を主尊とする龕、さらには尊格不詳な三並坐像を主尊とする龕が開かれている。遺憾ながら三並坐像龕の現状は内部諸尊がすべて表面を削りとられており、どのような着衣であったかすらわからないが、この三並坐像を「三清像」に比定する説もある。このような現存例により、少なくとも 8 世紀中頃の四川において三並坐像を主尊とする道教像が出現していたことが明らかとなった。しかし宋代以降の「三清像」と同様な意義を有する造像であったかについてはいささか疑問がのこる。牛角寨摩崖造像・三宝窟は正面壁に三宝像があるが向かって右側壁には、三宝像の一体とほぼ同寸で同じく宣字形台座に坐し腹前に凭几を配している尊格不詳の造像が表されている。凭几はすでに南北朝後期(西魏)～唐時代前半における道教の主尊像(老君ないし天尊)の重要なアトリビュートであり、おそらく本像も天尊像あるいは老君像であろう。また玄妙観はあくまでも老君を主尊とする大龕がその中心であり、三並坐像龕はいくつかある龕のひとつにすぎない。このように、これら三体一組の尊格は、未だ礼拝の中心的な存在となっていないと考えられる。むろん広義における三清像の出現は牛角寨摩崖造像・三宝窟により 8 世紀中頃に遡り得ることは明らかであるが、老君を崇拝する玄宗の治世下においてはあくまでも老君を中心とする信仰形態であったと推測され、三清像がその位置を占めるのはそれ以降であったと考えられるだろう。

次に検討したのがこれらと同時期の仏像との関連性についてである。やはりカギとなるのは四川に分布する造像で、四川広元市・皇沢寺の初唐(7 世紀)に開かれたとされる石窟に、三体の如来坐像を主尊とするものが存在する。これは台座上に結跏趺坐し、それぞれ向かって右から左手に鉢状のものを執る、禅定印、転法輪印となっており、本像を報告した李静傑氏は、これらを薬師、釈迦、阿弥陀と比定している。また四川資陽市安岳県・臥仏院に所在する盛唐(8 世紀)に開かれたとされる小龕に、三体の如来坐像を主尊とするものを確認することができる。これらは横長の同一台座に結跏趺坐し、いずれも腕は欠失するが中央の一体は転法輪印である。このように四川各地においては、唐時代の三如来坐像を主尊とする例を複数確認することができる。これら以外にも、二坐像と一倚坐像からなる三如来像を主尊とする例は四川で数多くみられ、さらに陝西においても小数ながら現存している、その尊格は、同様の坐制・すがたであっても釈迦・弥勒・阿弥陀、阿弥陀・二脇如来などと一様ではない。こうした「三如来像」という組み合わせが四川で流行していたことは、先に示したような道教における三体一組の主尊並坐像の出現と何らかの関係を有していると指摘できるだろう。

さらに地域性について考察するため、四川に分布する唐時代以前の仏像・道教像を広く集成したところ、すでに「三如来像」が出現していたことが明らかとなった。それは 1995 年に成都市西安路から出土した、南北朝時代後期(6 世紀)の作品と推測される紅砂岩製像(成考所 H1:6 号)である。主尊の三如来坐像はそれぞれ茎から伸びる蓮華座に結跏趺坐するもので、中央は施無畏与願印、左右は共に両手で膝上に鉢を執っている。このほか 1989 年にアバ・チベット族チャン族自治州汶川県で出土した南北朝時代後期(6 世紀)の紅砂岩製像(汶文所 2 号)もやはり三如来像を主尊としており、蓮華座に結跏趺坐する中尊と倚坐の左右二尊の組み合わせからなっている。おそらくはこうした「三如来像」の伝統が四川に根付き、唐時代にも引き続き造られたのであろう。

道教思想あるいは道教史において三清の研究はすでに多くの積み重ねがあり、唐時代前半には成立していたとされるが、実際の造像はこれに直結するものではなく遅れて現れている。玄妙観をはじめとして四川に分布する摩崖・石窟には先述したような釈迦と天尊が並坐する仏道併存像が多数みられ、仏教・道教が密接に結びついていた南北朝時代以来の関係性が四川では根強く存在していたことがわかる。そうした四川において、仏教で三如来像さらには三如来並坐像が流行したことに影響を受け、道教においても三清像の初期段階である三並坐像を主尊とする造像が出現したと考えられる。つまり造像としての三清像は道教教団・信仰者が独自に生み出したものではなく、このような仏像との影響関係により現れたと結論付けられるが、これはもとより仏教・道教の優劣・上下の関係性を示すものではなく、道教と仏教が共存しえた唐時代の四川における信仰のあり方を如実に伝えるものと捉えるべきであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

齋藤龍一「韓国国立中央博物館特別展「韓国の道教文化」及び関連シンポジウム報告」『東方宗教』124 号、75-81 頁、査読無、2014 年。

〔学会発表〕（計 2 件）
①齋藤龍一「日本における道教関連作品の受容について」日本宗教史懇話会サマーセミナー、2014 年 8 月 21 日、滋賀。
②齋藤龍一「日本における「道教の美術」展開催について」韓国国立中央博物館　国際学術シンポジウム、2013 年 6 月 3 日、韓国・ソウル。

〔図書〕（計 3 件）
①齋藤龍一「南北朝時代末～隋時代における道教像の地域性について」『中国における造形と信仰の諸相』成城大学民俗学研究所プロジェクト研究(平成24年度～26年度)報告書、77～98 頁、2015 年。
②齋藤龍一『図録　大阪市立美術館山口コレクション石造中国彫刻』大阪市立美術館、全 144 頁、2013 年。
③齋藤龍一「日本における「道教の美術」展の開催について」『道教文化展覧会の思潮と展望』韓国国立中央博物館、131～144 頁、2013 年。

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤 龍一　（SAITO, Ryuichi）
成城大学・民俗学研究所・研究員
研究者番号：70573385